

「夢現境」の月世界訪問譚

永 井 太 郎

序

洋の東西を問わず、月世界訪問譚は文学的なテーマの一つである。これについて論じた本も多く、西洋文学における月世界訪問譚については、ルキアノスの「本当の話」以来の系譜について、M・H・ニコルソン『月世界への旅』（高山宏訳。国書刊行会、昭61・6）がくわしい。谷川渥『幻想の地誌学』（筑摩書房、平12・10）はニコルソンの本などにに基づき、様々な月世界への旅を紹介している。松岡正剛の『ルナティックス』（中央公論社、平17・7）もまた、月をめぐる伝説や文学を紹介し、月の魅力について考察した興味深いエッセイである。

本論文で取り上げるのは、嵯峨の屋おむろの「夢現境」（『国民之友』明24・1）である。以下では、この作品が月世界への訪問譚であることに注目し、その発想の背景と同時代における位置について考察する。明治の二〇年代という日本の近代初期においていかなる月世界訪問譚が語られていたのか、その一端を明らかにしていこうと思う。

一

「夢現境」はあまり知られていない作品であるため、まず、作品の簡単な梗概を述べておきたい。時は、明治23年12月21日、孤影という一人の青年が、上野公園の観音堂にやってくる。彼は、天涯孤独の身で、人生と社会に絶望し、愛を得ることもできず、自然にのみ心を癒すことが出来た。そんな彼が、月の美しさに見とれていると、一人の美女が現れる。それは「なよ竹の赫奕姫」であった。孤影に同情し、思いを寄せたかぐや姫は、彼を月へと誘う。そして、ふたりは月へと至る。孤影が目

にした月の光景は美しく、美少年や「霓装羽衣の美人」が歩み、白髪の老人が釣りをする、平和で「仙境」のような世界であった。そして、かぐや姫の屋敷広寒殿もまた、夢のように立派なものであった。そこで、孤影は姫とともに楽しい日々を送る。そんなある年の八月十五夜、補陀落山での月見の宴（「月界で見る月は地球を月と眺める」）で、孤影は姫の父宮に紹介されることになる。孤影は、帝に拝謁し、促されるまま日本のことを語る。そのとき月（地球）をかすめた雁を孤影への馳走に打ち落とせという帝の命令に、一人の騎士が見事一羽を打ち落とす。孤影も負けじと一羽打ち落とすが、その雁がみるみる大きくなり、「汝は自身の罪を知らぬか？ 自ら善とするものに善はない。人間誰か無罪者であらう。汝自ら本に反って汝の罪惡を見よ。此処は汝の居る所ではない」といって孤影をつかみ、谷に投げ込んでしまう。気がつくと孤影は地球に帰っており、大海を前にした高山の中腹、空に突き出た崖の上に倒れていた。姫に救いを求めるが、姫は姿を現さない。絶望した孤影が海を見ると、岩の上に悪魔が立っている。そして孤影は、ついに海へ身を投げる。ここで、孤影は目を覚ます。実は全ては夢で、入江に突き出した石垣の上で彼は眠っていたのだった。しかし、彼は、夢の中で雁に言われた言葉思い出し悩む。そのとき讃美歌が聞こえてきて、彼は自分を救うのは神しかいないと思い、祈りを捧げる。

「夢現境」については、嵯峨の屋のロマン的傾向を最もよく示した作品であるといわれている⁽¹⁾。ここで注目したいのは、この作品が月をめぐる物語であるという点である。最初の章では、「夢現境」の他にも、嵯峨の屋の初期作品において月が象徴的な役割を担ったものがあることを確認し、彼の初期作品の「月」の意味について考察する。

⁽¹⁾ 中村光夫は「嵯峨の屋の浪漫的傾向をもっともよくあらわした作」と評する（『解説』（『明治文学全集 17 二葉亭四迷嵯峨の屋おむろ集』筑摩書房、昭46・11）所収）

彼の本格的な文壇デビュー作となる「無味気」(駸々堂、明21・4)において、すでに月は印象深い場面で登場する。主人公関翁山と師の令嬢との、月夜の晩の邂逅の箇所である。ここに「松にかゝれる月を眺むれば清光に懷を照さるゝ心地して心も何となくすがすがしく漸く浮世の塵を離れて思ひは天辺の雲に入りて北斗の転ずるをも知らざりき」という表現がみられる。あくまで修辭だが、発想において「夢現境」と通じるものがある。また「薄命のすゞ子」(『やまと錦』明21・12～22・3)の、三郎が愛するお鈴と月夜に人力車を走らせる場面では、「遙かに遠き雲の旗手で天女の奏べる樂の音か其かあらぬか夢現、走る車も車とは思はれぬ、神聖なる鳥の翼に乗って、次第次第に汚土を離れ、無垢の天上界へ昇る思ひ」と三郎の心情がたとえられる。これも同様である。

これらは、登場人物の心情を比喩的に表現したものであるが、登場人物自身の見た光景として天に上る様子が描かれるのが「野末の菊」(『都の花』明22・7～10)である。苦勞の末結婚したにもかかわらず、借金を作った夫匡が間もなく自殺してしまい、悲嘆にくれるお糸が、夫の死の三年後の旧盆の夜、下弦の月を見上げている、小説の終わりである。彼女は月を見ているうちに、悲しさが鎮まり、「遠い雲井の天、月の照所星の晃めく所」に愛しい人がいるように思われてくる。そして、靈魂がこの身を離れて、その彼方へ昇るように思われてくる。そして、愛の永遠を願いながら「飛行^{ひきょう}」していくお糸の前に、夫が姿を現す。

匡様！僅一言、瞬間に二人は一つに寄る、女は男の肩へすがり付く、男は其儘に抱へる、無窮の契り花の様な頬が他の頬と重りました。……時に天の使が微笑を含みながら出現して、羽衣を広げて、二人を擁護する如く見守って居ます。

夢ではないか？

お糸は喜の余り夢心地で、さう思ひました。然し現在二人は手と手を組ながら、羽化蟬脱の神仙の如く逍遙として、雲井の天を飛び行ます。

この直後、二人が墓石の前に立ったかと思うと、お糸ははっと顔をあげ、今までのことが「南柯の一夢」であったことに気が付く。

いずれの作品でも、月は美しさ、清明さを示すイメージである。「其時の夜の心は青き天、閃めく星、うつくしき庭の景色と、明月と優美なる女性に取囲まれて如何に楽しく」(「無味気」)とあるように、男と女の清純な愛の背景となり、その象徴的表現ともなっている。「夢現境」は、月への憧憬を修辭や一瞬の幻想ではなく、作

品全体のテーマとして、よりファンタスティックに形象化したものである。「流転」(『国民之友』明22・8)でも、暗鬱で、全てに懐疑的な林に対して、友人の畑野頼方は「此高潔の青空、此優婉の月光、天は我々の心を清め、月は我々の心を和げる」とその心を慰めようとするのであり、嵯峨の屋の作品において、月は理想や美と結びつくイメージとして重要なものだったのである。

しかし、嵯峨の屋の「月」はよく現実に抗しえない。仏教的な厭世觀をその人生觀の中心に据えた嵯峨の屋は、美しい理想的な世界が現実の中でむなしく過ぎ去ってしまうさまを描くのである。「無味気」の令嬢との邂逅の甘美さは過去のものでしかない。「野末の菊」は、杉崎俊夫のいうように、「自我の伸長や独立や、愛の可能なかぎりの充溢をも含めて、人間的営為の虚妄」⁽²⁾を描こうとした作品であり、お糸の昇天の幻想は一瞬のものである。「流転」においても、林に月の美は「唯色相上の觀念で、畢竟詩人の囁語」にすぎないと反論されてしまう。

「夢現境」では、両者の対立はより先鋭であり、「野末の菊」よりも内的な深化を見せている。一瞬のはかない望みではなく、その憧憬の裏には自分の罪に対する苦悩がある。笹淵友一のいうように、かぐや姫や月宮殿への「憧憬はこの苦悩のはげしさに比例」するのであり、「そこにこの作品の浪漫性がある」⁽³⁾。杉崎も「人間性の内的苦悩と、あくなき靈性憧憬の浪漫的情念」がテーマであると論じる⁽⁴⁾。他の作品よりも、苦悩の深化とともに、憧憬の念は明確なものとなり、月の世界も美しくイメージ化されている。彼のロマン的心情と月のイメージの結びつきを最も顕著にあらわした作品である。

しかし、ここでも月は現実の中で人を動かし、現実介入する力を持たない。救いの可能性は神に求められるのであり、苦悩する自我に対し、月は無力である。評論「平等論」(『国民之友』明22・10)では、「我慢」を破る方法として、「色相にたよつて心を清くする」ことがあるとし、その対象の一つとして「高潔の天や、優婉の月」をあげているが、小説世界では月は現実を越える力を持たされていない。嵯峨の屋の作品において、月はロマン的世界を象徴する重要なイメージだが、彼の作品においてはロマン性よりも、そのロマンが敗れ去る、むなしさ、あわれさのほうが主なテーマとなっているのである。

二

前章では、嵯峨の屋における月の意味について考察し

⁽²⁾ 杉崎俊夫『嵯峨の屋おむる研究』(双文社出版、昭60・2)第六章第一節「抒情の系譜」。松村友視は「嵯峨の屋御室における浪漫主義の生成」(『文学』昭60・11)で「仏教的厭世觀を背景とする浪漫的憧憬のあらわれ」と評している。

⁽³⁾ 笹淵友一『浪漫主義文学の誕生』(明治書院、昭33・1)第五章「矢崎嵯峨の屋」

⁽⁴⁾ 杉崎前掲書第六章第三節「浪漫主義の終焉——「夢現境」——」

た。笹淵は、「夢現境」のテーマについて、「嵯峨の屋一個の苦悩たるにとどまらず、時代のそれに繋がるものであった」⁽⁵⁾として、同じものを北村透谷の「蓬萊曲」や幸田露伴の「血紅星」にみている。杉崎も同様である。二章では、同時代の月を主題化した他の作品を見てみることによって、「夢現境」の文学史的意味について考察していく。

同じ時期に、月を象徴的に描いた作家として注目すべきなのは、笹淵や杉崎が指摘するように透谷と露伴である。透谷の「蓬萊曲」（養真堂、明24・5）で、富士にのぼる柳田素雄は次のように歌う。

美なるかな、美なるかな、白玉の盤、／美なるかな、美なるかな、清涼宮、／月輪よ、汝を思ふごとに、見る毎に、／雲に棧橋なきを怨むかし、／暗き夜の寒き衾、／浦のしほ風吹くときに、／われ汝を招びてわが琵琶を、／夜と共にかなで明かせしこといくそたび、／今もわれ、命ずることを白龍聴かず、／白龍聴かずして、わが胸に／汝に聞かす可き訴ごとの積り起りぬ。／いでわが琵琶に。／（仙姫歌わんとす）／其の歌は誰ぞや誰ぞや、／歌へや歌へや、其声は恋しき者なり、／其声は、わが琵琶の慕ふ声なり、／（仙姫の歌）／美しくや大空歩むひかりのひめ、／物をおそれずひとりたび、／星をあたりに散り失なせ、／雲を行手に消えしむる。」／われもひとり住むなり、この山に、／寂しと思ふけふこよひ、／松が枝伝ひて降り玉はずや、／かたり明さむ短夜を。」／羽衣無き身をいかにせん、／君を恋ふとて舞ひ難し、／つばさ並べて舞ひたらばと／仇し思ひぞ是非なけれ。」

美の象徴として月が描かれ、「雲に棧橋なきを怨む」は、その月に対する憧憬を月への訪問の願望としてあらわす。「羽衣」も仙姫が月の世界にいることを示唆する。「楚囚之詩」（春祥堂、明22・4）でも、牢獄にとらわれた「余」は窓から見た月に「美の女王」と呼びかける。物語ではないが、「人生に相渉るとは何の謂ぞ」（『文学界』明26・2）で、「明月や池をめぐりてよもすがら」という芭蕉の句について、「池は即ち実なり」といい、芭蕉は「実」を越えて「絶対的の物、即ち idea」に達したのであり、「池にうつり出たる団々たる明月は彼をして力としての自然を後へに見て一躍して美妙なる自然に進み入らしめた」と、月を絶対的なものへの媒介として象徴的にとらえている。透谷の月は、美や自由といった観念的な世界を表現するものとして用いられている。ただ、これはあくまで彼の修辭の一つであり、嵯峨の屋のような重要性を持っていない。「他界に対する観念」（『国民之友』明

25・10・13、23）で、透谷は「竹取」や「羽衣」をあげて次のように言う。

月宮は有形の物なり、月宮は宇宙の一小部分なり、人界に近き一塊物なり、その中に自在力あらず、その中に大魔力あらず、無辺無涯の美妙を支給すべきにあらざるなり。故に月宮を美妙の観念の中心としたる我文学は（前述二篇に就きて曰ふ）、一神教国に於ける宇宙万有の上に臨める聖善なるものを中心として万有趣味の観念を加へしめたるものに及ぶ能はず。

彼は西洋における他界の観念と対比して、日本文学が他界のイメージとして月を登場させることを問題化するのである。ここで、月は不十分な他界として、現実から離れることのできない日本文学の欠点として批判されているのである。

透谷の作品では月への希求が描かれるものの月世界そのものは登場しない。それに対して幸田露伴の「血紅星」（『民権新聞』明24・6・24）には「夢現境」と同じく月の世界の様子が描かれている。世の全てを「非」と言って忌み嫌い、行者のように一人暮らしている「皆非居士」が、自分の詩の独創性のなさ絶望しているところに月から仙女が降りてくる。さらに仙境の姫君、桂の宮の姫君が現れる。姫は一度月へ来て皆非の才で、月のことを詩に作ってほしいという。皆非は全てのわがまを聞いてもらうという条件で、月へと向かう。そこで、皆非はすばらしい歓待を受ける。酔った皆非は、朝が近づき帰る間際に、月でしか見られない一面の石板に詩を書こうとし、姫に題を求める。姫が人間を題に、そして、その一人である皆非自身を題に詩を書いてほしいと言うや否や、無念の火がはらわたを焦がし、血は霧となり飛び出し、煙は頭上に起こり、五体に火炎が燃え立つ。そして、あっと叫んだ刹那、彼は血紅の光を放つ星となって落ちていく。ここでも、自分も含めた俗世を超克した美・救いの象徴として月世界はあるが、物語の主題はこの月の超越性にはおかれていない。笹淵は、「夢現境」からの影響の可能性を示唆し、その上でこの作品は「増上慢の人間に対する諷刺」であって、「主人公皆非には孤影程の苦悩はない」と「夢現境」の方をより高く評価している⁽⁶⁾。

初期の小説に露伴の影響の強い正岡子規にも、月を描いた作品がある。それが「月の都」（『小日本』明27・2・11～3・1）である。主人公高木直人は叔母の家で会った水口浪子を思うが、浪子に縁談のあるのを知り、浪子からの手紙にただ「いやです」と返事をし、家に「月の都へ旅立ち候」と書き残して旅に出る。漂泊の旅の中で、一人の僧無風法師のもとで修行をするが、浪子への思い

⁽⁵⁾ 笹淵前掲書

⁽⁶⁾ 笹淵前掲書

から町へ帰る。そこで、浪子もまた自分を思っており、自分の手紙を見た後、身を投げ、病で死んだことを知る。直人は発狂し、浪子の幻を見ながら、さまよう。そんな彼の目に、浪子が天の羽衣をまとしてあらわれる。嵐の後、師である僧が松の枝に「天人の模様のある古代の小袖」と海に落ちた破れ傘を見る。傘には「月の都へ帰り候」とある。

同様の作品に高安月郊「天無情」(明 24・9)がある。ここでも全てに挫折した、失意の主人公秋月の前に洪水が起こり、波に落ちたところ、「天地俄かに耀て明光一発、忽ち手を取て半空より引上ぐるものあり」、それは失った浦子の手であり、彼女に抱きつこうとした瞬間、自分が依然として海岸に一人居ることに気づく。いずれの作品でも天・月から降りてくるのは、現実には自分がかめなかった夢なのである。

これらの作品は月に理想・憧憬の思いを託し自己の現実との懸隔をテーマとするものである。杉崎は、「夢現境」は「明治二十年代における自我の確立をめぐる社会との対立の中で、絶望と混迷の世界に挫折感を味わわねばならなかった青年の魂の自画像」を描いたものであり、それは「時代の潮流」であったと位置付けている⁽⁷⁾。内的な苦悩に対するロマン的な憧憬のテーマについて、「蓬莱曲」に先行する「夢現境」が先駆的存在であることは、これまでもすでに論じられている。同時代においても、上田敏が「夢現境」(『無名会雑誌』明 24・1)で、「かゝる思想は悲壯戯の基本」であり、「日本文学にかゝる高トランディ幽玄の思想を輸入したる」功を賞讃するのも、こうした点を指摘したものである。それに付け加えて、その憧憬が特に月を対象にしてそこへの訪問(もしくはその願望)を描いた点においても、「夢現境」は他作品に先駆けるのである。

その一方で、発表当時からこの作品の内的苦悩の浅さが指摘されてきた。砧斧生「新年附録の諸作」(『国民新聞』明 23・2・13)は、「Ideal poetry (理想詩)」として評価し、「厭人的懷疑者の煩悶」を象徴的に描いたものと正しく作品の意義を認めながら、その懷疑が「美人と宮殿」によって消散してしまうほどのものとししか描かれておらず、主人公の苦悩はその程度の「小心の不平等家」にすぎないと批判する。透谷は先にも触れた「他界に対する観念」の「竹取」などをあげて日本の他界観を批判した段の末尾に「我邦理想詩人の前途、豈惘然ならざらんや」と述べ、括弧で「嵯峨のやの『夢現境』をも

参考あらん事を請ふ」と付け加えているが、彼も嵯峨の屋の「夢現境」に、現実を離れない、日本的な他界の限界を見ていたと考えられる。中村は、透谷の評を引き、「月が単なる逃避の場」でしかなく、「形而上的なものに対する彼の確信の弱さ」を示すものであり、そこに彼の「思想の未熟さ」があると述べる。内的世界が現実と十分対抗するものではない、それを支える超越的な原理を持ち得ていない点が問題とされているのである。

嵯峨の屋についてよく言われる表現上の欠点⁽⁸⁾とともに、こうした指摘は首肯できるものである。内的な深さという点では、「蓬莱曲」等に劣るが、この作品の現在からみての面白さは、そうした内的なテーマと結びついた空想性にあるのではない。「蓬莱曲」が、観念的で生硬であり、そのイメージの具体性に欠けるのに対し、「夢現境」は、発想が古く、通俗的なきらいはあるものの、後述するように、古典や科学の知識を使って、月世界の様子を描こうとした点は評価すべきである。「夢現境」は、古さと新しさを持った、明治の近代文学における珍しいファンタジー作品として読むことが出来るのではないだろうか。

三

二章では、当時のロマン主義的な文学傾向の先駆的作品として「夢現境」を評価しようとした。ここからは少し方向を変えたいと思う。内面の物語という閉域ではなく、月世界訪問譚の連鎖の中での「夢現境」の位置をとらえたいのである。内的な憧憬の追求というテーマによっては後景化されてしまう、「夢現境」の背景にある、月世界訪問譚の広がりについて考察していく。

嵯峨の屋は「夢現境」の月世界訪問譚のアイデアをどこから得たのか。それは、第一には和漢の伝統的な文学からである。まず、改めて言うまでもなく、この作品がかぐや姫の物語であるという点である。明治期には、逍遙に「新曲赫映姫」(早稲田大学出版部、明 38・11)がある。嵯峨の屋の「夢現境」はそれより早いものである。彼の作品は古来数多く書かれ、近代以降も数多く書かれていく「竹取物語」のバリエーションの明治における最初期の例なのである。

しかし、「竹取物語」と「夢現境」では、月世界の物語として大きな違いがある。それは、「竹取」が月から来たものが月へと帰る物語であるのに対して、「夢現境」

⁽⁷⁾ 杉崎前掲書「浪漫主義の終焉——『夢現境』——」

⁽⁸⁾ 笹淵は、彼の「説明癖」が「悲劇的情熱を低調微温化してある」とし、杉崎も「飛翔せんとする空想の翼は通俗的、常識的な発想と、冗漫生硬な修辭に繋縛されて、『夢現境』を織出すことはできなかった」とのべる。宍道達「『夢現境』覚え書」(『広島女学院大学国語国文学誌』昭 48・12)は、「主題とは直接的な関係のない叙情的詠嘆や説明・談理的な部分」が「内容・主題の統一性を妨げている」点、イメージが陳腐旧套で、通俗的なものでしかない点、観念的で、言葉が蕪雜で「言辞のわりに内容の空疎感」を感じさせる点などを欠点としてあげている。

は地球にいるものが、月へ行って帰ってくる物語であることである。我々は、「竹取」の影響が強いせい、月の物語といえば、月から来たものが帰ってくるという物語を連想しがちである。「竹取」は言うまでもなく、謡曲「羽衣」でも、天女らは月から降りてきて、月へと帰っていく。それに対し、「夢現境」ではベクトルが逆なのである。確かに、「夢現境」にもかぐや姫が出てくるのだが、それは主人公孤影が嘆いている声を聞き、彼を慰めるために月から来たのであり、テーマ的な重要性を帯びていない。ここで、かぐや姫は、あくまで月を象徴する人物として登場してきているのであり、本来のストーリーから離れた、いわば一つのキャラクターなのである。この点で、「夢現境」はかぐや姫の物語でありながら、そこから離れていくことになるのである。

かぐや姫とは違う点、月から来たものの物語ではなく、月世界への訪問譚ということには、漢籍の影響があると考えられる。漢籍には、月世界への訪問譚が少なからず存在する。有名な月世界訪問譚としては、玄宗皇帝が道士の導きで月世界へ行く物語がある。月を愛してやまない玄宗皇帝を見た道士が、術を使って皇帝を月の都へ連れて行く。帰ってきて、皇帝が月の都で聴いた曲を伝えたのが、「霓裳羽衣」の曲であった、という霓裳羽衣曲の由来譚をなす話である。柳瀬喜代志「玄宗、月宮に遊ぶ一伝奇・詩話所載「霓裳羽衣曲」譚と『十訓抄』第十篇六七話」（『和漢比較文学』平4・7）によれば、道士が葉法善のもの（『津陽門詩注』（全唐詩）など）、申天師のもの、羅公遠のもの（『唐逸史』など）があり、唐宋の伝奇や詩話などには記載が多いという。

日本でも、玄宗皇帝の月世界訪問譚はよく知られていた。現存する書物の中で、これを取り上げた最も早いものが「十訓抄」である。以下のような内容である。

唐の玄宗の帝、年ごろ月を愛する志深くして、夜々むなしくし給ふことなかりけり。道士、これを感じて、帝に申すやう、「君、月を愛し給ふこと、年久し。月の中を見せ奉らむ」と奏しければ、帝、悦びてしたがひ給ふ。

道士、八月十五夜の月の、子の時ばかり、庭に立ちて、桂の枝を月に向ひて、投げ上げたりければ、銀きざしの階、月の宮につづきけり。この時に、道士さき立ちて、引き奉る。昇ること、いくほどならずして、月のうちに入り給ひぬ。玉の宮殿、玉の楼閣、数知らず。舞台の上に、十二人の妓女舞ふ。おのおの白衣を着たり。楽の声、舞の姿、のどかにすめば、玉を動かすかんざし、雪を廻らす袖、みな光りかかやけり。

二階の宮殿あり。薨ごとに玉をみがきて、目もあてられず。玉の簾を上げて、一人のあるじ、これを見る。すべて、ものの音、舞の姿、ところのありさままでも、心も及び給はず。斧の柄も朽ち

ぬべくおぼされけれど、名残惜しながら、舞だに見はてずして、帰り給ひにけり。

帝、この曲を心にしめて、世にとどめ給へり。盤渉調の声なり。霓裳羽衣といふ、すなわちこれなり。なかほどばかりを見給ひけるによりて、始終もなき楽なりといへり。

柳瀬によれば、桂の枝が月への階段となるのは、羅公遠系の話である。また、謡曲「鶴亀」（「月宮殿」ともいう）も、玄宗皇帝の同じ物語による作品である。謡曲「羽衣」の天女も「霓裳羽衣」をまとっている。

玄宗皇帝のもの他にも、「宣和遺事」には徽宗が林靈素の導きで、青い鳳凰に乗って月に向かう話が載せられている。月にある昊天大帝の城で、自らの政治への姿勢を問われ、下界へ落ちるとともに、夢から覚める。これにみられるように、漢籍には他にいくつも月世界訪問譚があると考えられる。論者の知識不足で十分調査できなかったが、その日本文学への影響は少なくなかったのではないだろうか。

次は、漢詩に目を向けてみよう。漢詩には夢で月へ行く、夢で月に遊ぶという題を持ったものがある。『日本漢詩』をざっと見たただけでも、そうした題を持つ作品をいくつも見つける事が出来る。その一つとして、市河寛斎「夢遊月宮吟」について、『江戸詩人選集』第五卷（岩波書店、平2・7）の揖斐高に基づいてその読み下しをあげる。

人有り 夢に遊ぶ 月宮の畔
ひょうよう 飄飄として仙せんと欲して 心先ず乱る
 星槎一片 河漢うかに泛うかび
うじやくきょうとう 烏鵲橋頭 始めて岸に上がる
 雲間 高く聳ゆ 広寒宮
 姮娥は坐して殿の当中に在り
 須女 織女 皆な排列し
せい 清き嘯 高くあが颺る 桂花の風
せん 蟾と兔は相い邀むかえて北斗を把り
けんえん 激灑たる瓊漿 酌みて手に在り
 銀盤 玉は堆うづたかし 河中の魚
 妙舞 風は翻る 春前の柳
 別に水晶の小洞房有りて
 白雲を被と為し 氷を牀と為す
 此の際の飲娛はなは 苦あだ嗜け易く
 人間の秋夜の長きに比せず

また、江村北海「夢遊月宮」（『北海先生詩鈔』）は「明月天宮杳 青雲自有梯 銀橋橫漢架 神風簫聲響 仙娥舞袖齊 醒来知是夢 恍聽五更鷄」という詩である。この他にも、大窪詩仏「夢遊月宮」（『詩聖堂詩集』）や石川丈山「月夜記夢」（『新編覆醬集』）、龍草廬「夢遊月宮」（『草廬集』）、山田玉峰「夢遊月宮」及び卷菱湖「夢遊月宮」（稲毛屋山編『采風集』）などがある。

夢で月宮に遊ぶとは、漢詩のよくある題の一つなので

ある。明治の小説にも、これに基づいた文章がある。田山花袋「小桃源」(『文芸倶楽部』明28・11)における「一步一步、その歩行く姿のしとやかさ。われは恍惚として、夢中月宮に遊びたるの感あり」や、泉鏡花「冠弥左衛門」(『京都日出新聞』明28・5)の「奈良法師其と見て、腕捲りして突立てば、我身よりも小作の男、後様に三結の処に腕組みして少し反気味になり、皓々たる月を見るにや、遊魂半ば去つて月宮に朝す、といふ形態、無心に悠々と行く足、宙を踏むかと軽げなり」などがそれである。それほど、当時の読書人にとっては、当たり前前の知識であったということであろう。

「夢現境」の発想は、「竹取」を含めた、こうした古典漢籍から来たものであったと考えられる。月世界への訪問が夢だったというのも、伝統的なパターンを踏襲したものである。月世界には「霓装羽衣の美人」が歩んでいたというのも、そのわかりやすい現れである。ただ、今回調べることが出来たのはほんの一部である。時代的により近い江戸の文学には、他にも多くの月世界訪問譚があったと考えられる。明治になってからであるが、仮名垣魯文「空中膝栗毛」は、天に昇る竜に随いて、月の都へ行こうとするすっぽんと石亀の話である(『月とスッポンチ』明11・12・1～12・22 未完)。こうした例を含めて、月世界訪問譚はよく知られたテーマであり、「夢現境」はそれを受け継いでいる。趣向としての月宮に遊ぶ物語を内面のドラマへとその意味を転換させたのである。だからこそ、月から来たものの物語ではなく、月へ行こうとするものの物語でなければならなかったのである。そして、続く「蓬莱曲」以下の作品も、月をめぐる伝統的な古典漢籍の言葉を使って内面的なテーマを描いていこうとするのである。

四

「夢現境」の月世界訪問譚の発想の中心には、伝統的な文学があった。しかし、それだけだろうか。明治という時代は新しい月世界訪問譚を、日本の文学にもたらした。それがジュール・ヴェルヌのSFである。最後に、「夢現境」に対するヴェルヌの影響の可能性について考える。なお、以下の月世界SFについての記述は、横田順彌『日本SFこてん古典』(早川書房、昭55・5)第四回「日本月世界旅行譚」及び長山靖生編著『懐かしい未来』(中央公論社、平13・6)の「夢の月世界旅行」解説での記述に大きく拠ったものである。

ヴェルヌの月世界旅行は二作品よりなる。「地球から月へ」(1865)は、月ロケットの開発と、搭乗者が集まり、完成したロケットが月に発射されるまでである。ロケットは一時連絡が途絶え、月の衛星になってしまったと伝えられる。続編「月を回って」(1869)では、その心配が杞憂に終わるものの、小惑星の影響で月への着陸が出

来ず、月の裏側を回り、月を一周して、地球に無事帰還する。初期のSFの代表的な作品であり、現代のわれわれにとっては、月世界旅行といえば、こちらの方を一番に思い出すだろう。明治一〇、二〇年代、ヴェルヌは最も広く読まれた作家の一人であり、この本もまもなく日本でも翻訳される。「地球から月へ」が井上勤訳『九十七時二十分間月世界旅行』として、明治13年3月から11月にかけて二書楼から四巻で出される。同じ11月にはこの四巻を合巻にしたものが三木書楼から刊行される。14年3月には同巻の巻五から巻十が二書楼から、それを合巻にしたものが三木書楼から、と同じ本が二つの書店から並行して出版される。「月を回って」もまた井上勤によって明治16年7月に『月世界一周』(博聞社)として出版される。ヴェルヌの月世界旅行は日本の作家たちにも影響を与え、ほぼ時を同じくして日本人自身の手による月世界旅行の物語が発表される。そのいくつかを紹介しよう。

樓島山人『月世界遊行記』(開成舎、明13・10)は、主人公マルメルスが門弟とともに気球に乗って月へ向かう。月には進んだ文明があった。月の帝から月世界の様子や社会の仕組みについて聞き、マルメラスも地球のことを帝に教える。再び気球に乗って地球に帰るが気がつくそれは夢であった。峴岳樵夫『文明世界 宇宙之舵蔓』(明20・12)は、月世界旅行を含んだ立身出世もの、という奇妙な作品である。孝行者のチャールズは努力の末、十歳で学校を卒業し、ベルリンで大学士となり故郷に錦を飾る。世界をめぐり、そこでの見聞を本にし、評判を得る。さらに宇宙に関心を持ったチャールズは電気による特殊な気球で月に向かう。月は、高度に科学技術の発展した文明世界で、道徳や政治も地球より発展していた。巨大な高層建築が並び、他の火星や水星などに、「空車」という乗り物に乗って行き、その文明と交流し、遠くからものを取り寄せる機械を使うなど、地球とは比べ物にならないほどの文明がそこにあった。チャールズは、水星や火星、木星へも行く。そして、地球に帰り、再びそこでの経験を本にして、人々に知らしめる。チャールズは、請われて新聞の社長になり、巨万の富を得る。その後、社長を辞し、両親とともに、静かに田舎で暮らすようになる。北海散士『夢幻現象 政海之破裂』(明昇堂、明21・11)は月世界をかりた政治小説である。ヴェルヌの『月世界旅行』を読んでいた北海散士のところに白髪の老人の月の使者がやってくる。月では、「サウス」国が「ノース」国に圧迫されており、散士に月まで来て、両国民を善導してほしいという。散士は月人救済を約束し、老人が姿を変えた竜に乗って月へ向かう。月で金鉱を発掘して「サウス」国を援助し、そこを拠点に人民を啓蒙し、政府を立て直そうと政府打倒を試みる。しかし、決起して進軍しようとしたところで計画は失敗し、散士自身の生命に危機が迫り、観念したときに

目が覚める。全ては、ヴェルヌの本を読みながら寝てしまった夢であった。羽化仙史『月世界探検』（大学館、明 39・1）はかなり荒唐無稽な作品で、透視能力を持つ女性に特殊な羽衣を着せて月に向かわせる。それが月世界との間に戦争を引き起こし、月征伐隊の活躍で月が日本の支配下に置かれるようになるという作品である。明治 40 年 10 月には『探検世界』臨時増刊号で、特集「月世界」が組まれる。同特集には、月に関する科学的な知識を述べた啓蒙的なエッセイや、月についての伝説や文学を紹介するエッセイに加えて、月世界訪問を描いた小説がいくつも掲載されている。町田柳塘「青年月世界巡遊記」は、漢籍に基づくものだが、堀内新泉「月世界探検隊」や江見水蔭「月世界跋涉記」や押川春浪「月世界競争探検」、天空界潤道人「月世界新婚旅行」等、ロケットのようなものに乗って、月世界を探検し、月に住む人類や化物に出会う、月を舞台にした SF 的作品が並ぶ。

ニコルソンは、ヴェルヌ以前に、ガリレオの望遠鏡による月の観測以降、月世界旅行の物語が盛んになったと述べている。月は、「月盗人たる科学そのものが天体望遠鏡を通じて地球と寸分たがはぬ「あばただらけの月面」を暴露した瞬間から、別世界としての機能を与えられた」（荒俣宏『別世界通信』月刊ペン社、昭 52・5）のである。日本でも、古典的な趣向としての月世界訪問譚しかなかった中に、月に関する科学的知識の普及とともに、SF の一つとしての新しい月世界訪問譚が生まれた。透谷の言葉を借りれば、月は「有形の物」であり「宇宙の一小部分」であり、「人界に近き一塊物」だからこそ人々の想像力を刺激したのである。まだ、火星への空想は十分浸透しておらず、明治時代、月こそもっとも代表的な宇宙の「イメージメーカー」（荒俣）だったのである。

こうした月への関心の高まりの中に、「夢現境」をおいてみたい。「夢現境」の発表は明治 24 年。ヴェルヌの

月世界旅行が翻訳され、ほぼ同時にいくつかの日本人による月世界 SF が書かれたすぐあとである。少し意地悪く言えば、はやりの月世界ものであったのである。嵯峨の屋は、同時代のこうした月世界 SF を意識していたのではないだろうか。そして、その流行への対抗心が「夢現境」を生んだのではないだろうか。月世界旅行という発想に刺激を受けつつ、あえてそれを新しい科学ではなく（孤影とかぐや姫が「地球の大気」を突き抜けて月へ向かうという記述は、些細だが科学的ではある）、伝統的な題材を使って書こうとしたのである。月への憧憬が修辞や一瞬の幻想でしかなかったものが、作品のほとんどを覆う月世界訪問譚へと変化したことは、もちろん内的な苦悩の深化があるのだが、こうした文学的な状況とも関連するのではないだろうか。「夢現境」は新たな SF に対する伝統的な題材による対抗であり、否定的な形で現れた影響だと評価すべきだと考えられる。

五

「夢現境」は伝統的な趣向としての月世界訪問譚が、科学に基づく SF 的想像力の影響と、近代のロマン主義的な苦悩という新しい文脈のもとに再編された作品であった。月宮に遊ぶ趣向が SF への対抗から呼び出され、内面的なテーマを描き出すものとなった。月をめぐる新しい物語であり、この後に透谷や露伴が続くのである。「夢現境」は内的なテーマと空想的な想像力の結合の試みの一つとして、明治二〇年代の興味深い作品なのである。